短大生の英語基礎力の動向

中島　直樹

1．はじめに

平成20年４月，城西短期大学において英語力調査が実施され，外国人留学生を除く81名の短期大学ビジネス総合学科新入生が受験した。近年，短大を取り巻く環境が大きく変化し，それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語学力低下の傾向は年々顕著になり，特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて，ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため，実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から，新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており，その調査結果を基に，坂戸キャンパスの一年次の必修科目であるTOEICイングリッシュＩＡ・ＩＢ（TOEICのリスニングセクションに重点を置いた演習）とTOEICイングリッシュＩＣ・ＩＤ（TOEICのリーディングセクションに重点を置いた演習）を能力別のクラス編成にし，これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は，本年度学生の英語力調査の結果を，昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより，本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に，一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して，どれだけスコアが伸びたかを調査し，本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて，12月に本学で実施されたTOEICテストのスコアも比較・検討し，今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2．過去数年間の英語力調査の結果を振り返って

平成14年度に英語力調査の問題を改訂し，それ以降，継続して同じ問題を使用している。調査自体は平成14年度以前にも実施されていたが，難易度の高い問題であったため，この年度に基礎力を重視した試験問題を新たに採用した。年々，学生の英語基礎力が低下し，平均点が30点台に

低迷するようになり，試験としては難しすぎると判断したためであった。

はじめに，平成14年度の英語力調査から振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式，試験時間は１時間，全50問で100点満点の試験であった。93名が受験し，全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表１の通りである。

表１　平成14年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	67名	約57.8点
現 代 文 化	26名	約54.7点
全　　体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると，かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が６名，次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名，29点以下のほとんど基礎力のない学生が７名おり，その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし，よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき，この３つの層が平成14年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に，平成15年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し，全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表２の通りである。

表２　平成15年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	47名	約55.0点
現 代 文 化	12名	約52.6点
全　　体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては2.8点，現代文化学科においては2.1点，全体では2.4点下がった。また，この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが，基本的には14年度とそれほど変わってはいなかった。14年度と違う点は，90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（14年度は６名）ことと，中間層の領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの中間

層にはいくつかの山があったことが14年度の英語力調査の検証で分かっていた。そして，14年度は60点から74点までの上位の層に26名，45点から59点までの中位の層に24名，30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて，得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，平成15年度は上位の層に16名，中位の層に17名，下位の層に17名と，中間よりやや下に比重が移っていた。

次に，平成16年度の結果について検討したい。43名の新入生が受験し，全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表３の通りである。

表３　平成16年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	33名	約50.5点
現 代 文 化	10名	約50.4点
全　　体	43名	約50.5点

平成15年度の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては4.5点，現代文化学科においては2.2点，全体では4.0点下がった。平成14年度から年々下降の一途をたどっていて，短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。この傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いていた。

全体の得点分布は基本的には15年度とそれほど変わっておらず，15年度をほぼ継承していた。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも，中間層の形が逆転したことも15年度と同様であった。それに加えて，75点から89点までのある程度基礎力のある学生が５名となり，前年より３名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると，60点から74点までの上位の層に９名，45点から59点までの中位の層に13名，30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。平成14年度までは，得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，平成15年度から中下位に比重が移り，その傾向は平成16年度も続いていた。

次に，平成17年度の結果について検討したい。80名が受験し，全体の平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表４の通りである。

表４　平成17年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	57名	約56.9点
現 代 文 化	23名	約55.5点
全　　体	80名	約56.5点

前年度の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては6.4点，現代文化学科においては5.1点，短大全体では6.0点上昇した。平成12年度から短大入学生の英語力調査のデータを採っているが，前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。数値的に見て，平成14年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても，短大全体では6.0点も平均点が上昇したので，まったく異なった形になった。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが，75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり，この層が本学を引っ張る牽引車的存在になっていた。受験者数が80名なので，約４人に１人がここに属していたことになり，この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が６名いたが，この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると，60点から74点までの上位の層に18名，45点から59点までの中位の層に16名，30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は，得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて，平均点を下げる最大の理由となっていたが，17年度になってようやくその流れが変わった。

次に，平成18年度の結果について検討したい。82名が受験し，全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表５である。

表５　平成18年度英語力調査結果（４月実施）

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが，17年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。17年度にいったん上昇に転じたが，18年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。全体の得点分布を見てみると，受験者数は前年とほぼ同数であるにもかかわらず，グラフの形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが，基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に，前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて，この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが，18年度はその層には６名しかいなかった。ピークは40～44点のところにあり，16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が９名いたが，この層に関しては，前年の６名と大差がないと考えてよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様である。中間層の上位の層には15名おり，前年の18名と大差はない。しかし，中位の層は前年の16名から７名増の23名，下位の層は21名から８名増の29名と

なっており，中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目につく。つまり，75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度でもあり，高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し，ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが，18年度はその層が激減し，代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げている最大の原因であった。

最後に，平成19年度の結果について検討したい。受験者数69名，全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表６である。

表６　平成19年度英語力調査結果（４月実施）

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約51.0点

ビジネス総合学科になって２回目の英語力調査であったが，前年度の平均点約48.3点から2.7点上昇の約51.0点となった。前年度と比べ，平均点が若干上昇したため得点分布グラフの形にわずかな変化が見られるが，特に大きな変化とは思われない。得点のより低い層により多くの学生が集中するというこれまでの傾向を継承していると言ってよいであろう。30点から74点までの中間層を見てみると，60点から74点までの上位の層に12人，45点から59点までを中位の層に18人，30点から44点までを下位の層に22人となっており，これまで通り基礎力のない学生の多さが目立つ。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は，昨年の６名から，今年は11名に増加している。ピークは18年度は40～44点のところにあったが，19年度は50～54点に移動しており，これらが19年度の英語力調査の明るい材料であった。

3．今年度の結果について

今年度もこれまでと同様に，出題形式は全問マークシート方式，試験時間は１時間，全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く81名が受験し，全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表７である。

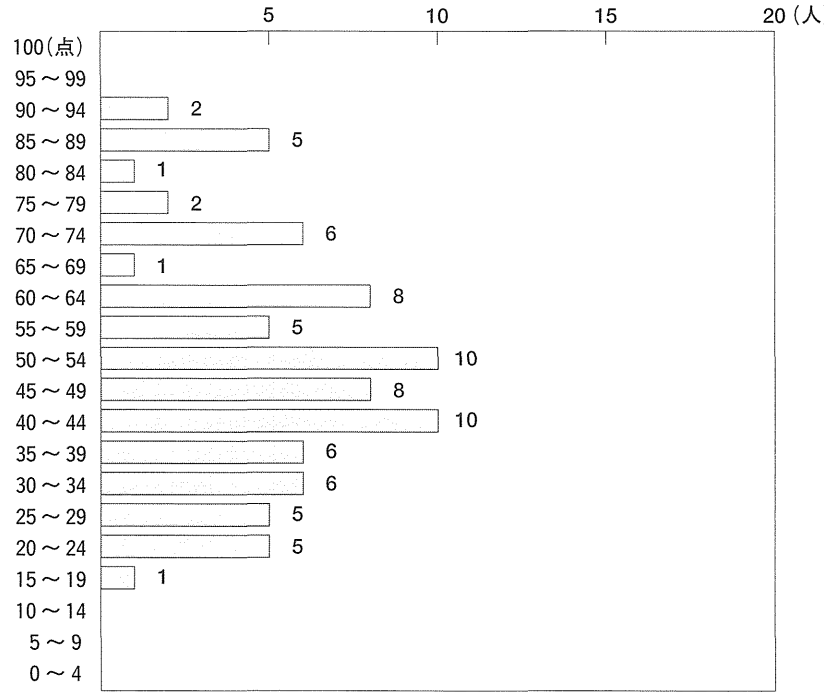
表７　平成20年度英語力調査結果（４月実施）

学　　科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約51.0点

受験者数は12名増加，平均点は前年とほぼ同じであった。だが，前年度と比べ，得点分布グラ

フの形はわずかに異なっている。

平成20年度英語力調査結果得点分布グラフ（４月実施）



ピークは50～54点と40～44点のところにあり，いずれも10名。30点から74点までの中間層を見てみると，60点から74点までの上位の層に15人，45点から59点までを中位の層に23人，30点から44点までを下位の層に22人となっており，中位の層が下位の層を１名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていないが，中位の層が増加したことはよい材料であろう。それに加えて，今年度は85～89点の層に５名，90点以上のかなり基礎力のある学生が２名いたことは喜ばしいことである。しかし，29点以下のほとんど基礎力のない学生が11名（昨年は６名）おり，平均点が上がらない原因になっている。かなりできる学生もいるが，それと同数のまったくできない学生もいて，平均すると昨年並みということであろう。

4．問題の検証

次に，実際に出題された問題を検討し，正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず，最も正解率の高かった問題は２番であり，正解率は86.4％であった。

（2）A：Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B：Sure.（　　）straight down the street. It's on the right.

1. Break　　2. Catch　　3. Go　　4. Put

昨年は82.6%の正解率であった。

次に正解率の高かった問題は10番と37番であり，正解率は82.7%であった。

(10) A：I don't know（　　）Central Park is.

B：It's not far. I'll show you.

1. who　　2. when　　3. where　　4. whose

昨年は76.8%の正解率であった。不正解者の多くが2を選んでいた。

(37) A：I'm sorry to be late. The bus didn't come on time this morning.

B：（　　）

1. This afternoon.　　2. Don't worry.

3. Yes, you can.　　4. No, I didn't.

最近の学生はこのような会話形式の問題には慣れているようだ。正解率は昨年とほぼ同じ。

次に正解率の高かった問題は1番であり，正解率は80.2%であった。

（1）A：Do you know what language is（　　）in Mexico?

B：Yes. It's Spanish.

1. thrown　　2. lent　　3. spoken　　4. told

正解率が80%を越えたのは以上の4問であった。

反対に，最も正解率の低かった問題は18番と26番であった。

(18) If it（　　）tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy　　2. rains　　3. raining　　4. to rain

であり，正解率は16.0%と低かった。不正解者は1と3に大きく分かれた。be動詞がないのに主語itの後ろに直接形容詞をつなげたり，ing形を続けたりする基礎力不足が目立つのは毎年同じ傾向である。この問題は昨年も正解率が最も低く，20.2%であった。

(26) Be kind（　　）old people on the train.

1. at　　2. to　　3. of　　4. from

これも正解率は16.0%で，74%の学生が3と解答していた。

次に正解率の低かった問題は50番の

(50) 私はいつも学校から帰る途中，公園を通って帰ります。

I always walk across（① from ② the park ③ on ④ way ⑤ my ⑥ home）school.

1. _①_②__　　2. _⑤_③__　　3. _⑥_⑤__　　4. _③_④__

であり，正解率は20.9%であった。4割以上が2を選んでいた。

1番から35番までは基本的な文法・語法，36番から40番までは会話，41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。どの問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが，今年の学生も不定詞，関係代名詞等の基本的な文法が弱く，中学校レベルでつまずいている現状が明らかになっている。

5. 1月実施の英語力調査およびTOEICテストの結果について

これまで，4月に実施された英語力調査を基にして，今年度の学生の英語力を分析してきたが，1月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し，どの程度スコアが伸びたかを調査した。第1回目（4月実施）と第2回目（1月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表8である。

表8　英語力調査結果比較

第1回目	第2回目	得点差
約51.0点	約52.7点	プラス1.7点

第2回目（1月）は67名が受験し，平均点は52.7点で，第1回目より1.7点上昇した。上昇幅はここ数年の中では物足らないが，何とかプラスにすることができた。もちろん得点を下げた学生もいるが，多くは現状維持か得点を上げている。29点以下のほとんど基礎力のない学生も11名から6名に減った。数名の学生がブレーキになって平均点の上昇を阻んでいる。

また，今年度も，12月に本学で実施された第4回TOEIC IPテストを受験するように指導し，短大1，2年生54名が受験した。全学との比較は次の表9の通りである。

表9　第4回TOEIC IPテスト結果

学　　部	受験者数	平 均 点
短　　大	54名	235.4点
全学（短大含む）	175名	270.8点

短大を含む全学で175名が受験し，平均点は270.8点であった。短大の平均点は253.5点であり，全学の平均点を下回っている。短大の最高点は415点，300点以上の学生は8名であった。TOEIC400点を目指して授業をやってきたが，今年度は目標を達成することができた。

6. おわりに

最後にもう一度，全体の調査結果を振り返り，今後の英語教育の指導について考えてみたい。平成14年度からの全体の平均点の推移を見てみると，14年度：56.9点，15年度：54.5点，16年度：50.5点と年々下降の一途をたどり，17年度に56.5点といったん上昇に転じたが，18年度に48.3点と大きく下げ，19年度:51.0点と戻し，今年度も51.0点となっている。特に，平成18年度入学生の学力低下は甚だしく，平均点48.3点と初めて50点を割り，過去最低を記録した。その後はどうにか持ち直し，2年続けて50点を回復することができた。評定平均値の高い学生を多く集められた平成17年度を除いて，平均点は年々低下していたが，なんとか今年度も最低限のレベルは維持することができた。本学に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下傾向にあることは否定できないと思うが，やや下げ止まりした感もある。とは言え，平均点が50点ちょっとであるので，多くの学生が中学校レベルでつまずいており，基本的な文法を修得できていないことは明らかである。年間を通してたえず基本を押さえながら授業をすることによって，何とか平均点を数年前のレベルに引き上げることができているというのが率直な感想である。

TOEIC については，400点の学生を出すことを目標に授業を行ってきたが，これについては目標を達成することができた。300点以上が８名おり，そのうち５名が１年生であるので，2年次のインテンシブ・イングリッシュの中で400点を目指して指導していくつもりである。卒業までにひとりでも多く TOEIC400点レベルの学生を育てることを今後の目標としたい。